

1. 下関の名を関した国際条約

下関は歴史の街です。交通の要衝であったこの海峡の街を舞台に、古代から近現代まで、日本の歴史を動かす数多くの事件が発生し、興味深いエピソードを残しました。その中でも、日本史の教科書で下関の名前が必ず登場するのは明治時代です。1895年にこの地で締結調印された日清講和条約が、「下関条約」と呼ばれているからです。条約に締結交渉を行った都市名を付けることは海外では珍しくありませんが、日本ではあまり例がありません。1895年には、下関市はまだ旧名の赤間関市(馬関)でしたから、当初この条約は「馬関条約」と呼ばれていました(中国では現在でもそう呼ばれています)。その後、1902年の下関への市名変更に伴い、条約も呼称が変更されたのです。

2. 下関条約のもうひとつの舞台：引接寺

下関条約の締結交渉が料亭「春帆楼」で行われたことは有名です。その敷地内に建つ日清講和記念館は観光名所となっています。こちらを表舞台とすれば、裏舞台に当たるのが引接寺(いんじょうじ)です。引接寺は亀山八幡と赤間神宮の間、国道から一本入った裏通りに建つ、開山450年の浄土宗の古刹です。藩政時代は朝鮮通信使を迎え、日清講和の際には清国側使節団の宿舎となりました。

引接寺の本堂は戦災により焼失し、最近再建されたものですが、三門は1769年建造のまま残されています。この三門の屋根の裏側に、差し渡し2メートル近い、大きな木彫りの龍が据えられているのをご存知でしょうか。それと知らなければ通り抜けてしまいますが、門の真下に立って見上げれば、龍の鋭い眼光に思わず身をすくめることでしょう。

水神である龍は建物を火災から守るともいわれ、寺社建築の意匠には珍しくないのですが、天井に木彫りで一体の龍を据える独特の様式は、他に例の見られないものです。

3. 李鴻章銃撃事件

日清講和の折、この引接寺に清国全権、李鴻章が入ったのは、丁度115年前の昨日、1895年(明治28年)3月21日のことです。3月24日、春帆楼での和平交渉を終えた清国側使節団が宿舎の引接寺の手前に差し掛かったとき、李鴻章が短銃で顔面を狙撃されるという事件が発生しました。撃ったのは群馬県出身の小山豊太郎という壮士で、直ちに捕縛され、後に終身刑を宣告されています。

4. 引接寺に搬入された水族館

撃たれた李鴻章は引接寺に避難し、手当てを受けます。幸い生命に別条はなく、引接寺内で療養し、快方に向かいました。その際、下関市民からのお見舞いとして、大きなガラス水槽に海水を満たし、魚や蛸を入れて病室に搬入したとの記録が残っています(高橋是清自伝)。これが事実とすれば、下関水族館「海響館」の走りといえるかも知れません。

5. 今も残る李鴻章道

李鴻章の傷は半月ほどの療養で快癒し、左眼の下に残った弾丸を摘出しないまま、4月10日には和平交渉が再開されました。李鴻章一行は、再度の襲撃を避けるために、紅石山沿いの細い道を利用して春帆楼に通います。この裏道が今も残る「李鴻章道」です。交渉は順調に進み、4月17日、下関条約が調印され、李鴻章は下関を離れました。

この李鴻章道から上に登ると、藤原義江記念館「紅葉館」にたどり着きます。更にこの紅葉館の裏山を登ると、紅石山の頂に、赤間神宮第2代宮司でもあった幕末の政商、白石正一郎の奥都城(おくつき、神道における墓所)と、幕末の志士、真木菊四郎(真木和泉の次男、岬之町藪之内で暗殺された)の墓所がひっそりたたずんでいます。下関の裏通りには、まだまだ奥深い歴史が隠されているようです。



引接寺三門



引接寺の龍